農業×畜産×若者×地域が連携し開発

規格外スプラウトを飼料に

富山　ジェラート「めぐるめミルク」

めぐるめミルクの商品開発に携わった関係者

【富山】そよ風農産物直売所（富山・射水店）と地場もん屋総本店（富山市）で販売しているジェラート「めぐるめミルク」は、規格外スプラウトを飼料として食べた牛のミルクを使用しており、素材の風味が活きた濃厚な味わいの逸品だ。

青年農業者で組織した氷見射水高岡地区青年農業者協議会の研修で、会員の「㈱cloverFarm」代表の青沼光さん（39）が同じ会員の中谷幸葉さん（33）が顧問を務める㈲庄東ノーサンを視察した際に、規格以上に成長したスプラウトの処理方法について悩んでいることを聞き、牛に食べさせられないかと提案したことが開発のきっかけとなった。

射水市のアイドルユニット〝IM Zip〟が名付け、「戸出ジェラート」として商品化。射水市アグリテックバレー推進サポートセンターも販売活動に携わり、業種や分野を超えた地域の盛り上げにも一役買った。

青沼さんは「食品残渣などを飼料とするエコフィードに取り組む自社の理念とマッチした」と語り、中谷さんは「廃棄コストを低減することができたこと、地域課題に一丸となって取り組めたことが大きな収穫。今後もこのような取り組みができれば」と意気込みを語った。

地域計画実現に向け検討会

「農村に何か恩返しを」

北海道・弟子屈町　塩沢稔宏さん

経営廃止後も地域お手伝い

【北海道】弟子屈町農業委員を7期、農業委員会会長を5期務めた後、農業経営から引退した塩沢稔宏さん（73）。60㌶以上あった経営農地は近隣の農業者に貸し付け乳牛のすべてを処分したが、現役時代に使っていた機械の多くは処分したものの、車庫には今でも油圧ショベルカーやトラクターなどの機械が並んでいる。「機械の操縦や整備が好きなんだ」と話す。

16歳で地元の農協連合会に就職し、定時制高校に通いながら機械整備の技術を磨いていたが、勤め先の事業再編で整備の仕事の拠点が自宅から遠くなることをきっかけに、地元の農協（当時）に転職。畜産農家に飼料を配送する仕事に就いていたが、26歳で父親から酪農経営を引き継いだ。

2023年に酪農経営に終止符を打った塩沢さんは現在、酪農家が飼料畑の周囲に設けるシカ柵の設置作業を請け負っている。農家の用意した資材を用いて、他の作業員と一緒に金網柵を設置。自前のショベルカーを使っての杭打ち作業が塩沢さんの担当だ。

「多頭化とそれに伴う経営規模の拡大で、人手が足りないのが農家の現状」と自身の経験を振り返る。「遊んでいるのなら手伝ってほしい」という地域の仲間からの声掛けを受け、「農村に住み続けるなかで、何か恩返しをできれば」と考え、今年から請負を始めたという。

愛用のショベルカーの運転席に収まる塩沢さん。「25年前に中古で買ったが、今なら当時よりも高く売れるかも」とほほ笑む

農業の振興・発展めざし

神戸市で現地交流会

兵庫県農業法人協会・ひょうご農林機構

【兵庫】県農業法人協会（原智宏会長）と公益社団法人ひょうご農林機構（多田勝利理事長）は1月14、15日、神戸市で現地交流会を開催した。原会長＝写真＝からのあいさつに続き、近畿農政局の志知雄一局長と県農林水産部の呉田利之次長兼総務課長から来賓あいさつが行われた。続いて、プロローグとして原会長からの趣旨説明と、東馬場怜司副会長の「なぜ、忙しい中で協会活動するのか」と題したメインスピーチを実施。東馬場副会長は、自らの経営者としての成長と、経営する会社の発展を重ね合わせ、協会活動で得られた気づきや成果などを強調した。

その後、協会理事をファシリテーターに、参加者によるグループ討議が行われ、熱心な議論が展開された。

最後に八木隆博前会長の総括が行われ、参加者は交流会を通して「真の経営者をめざすとともに、農業の社会的ステータスの確立と振興・発展に貢献する」との協会目的を改めて共有した。

地域計画実現に向け検討会

沖縄・中城村

RMOの必要性を村長に報告

【沖縄】中城村では、2024年度に策定した地域計画の実現に向け、25年5月から12月にかけて検討委員会を計7回開いている。委員会には、全国農業会議所の澤畑佳夫氏がコーディネーターとして参加し、農業青年クラブ、自治会長、JA、一般公募者など多様な関係者が加わった＝写真。

検討委員会では、儲ける農業の実現、農産物のブランド化や販路拡大、体験農場や農泊の推進などの意見を深める中で、行政主導の農業施策には限界があるとして、新たな実行主体にRMOの設立が必要との結論に至った。

設立の基本方針としてRMOを地域計画の実行主体に位置づけ、農地保全、農業経営支援、交流促進などの取り組みを主体的に担う体制構築を掲げ、座談会参加者の意見なども反映させた報告書を村長へ提出した。

比嘉麻乃村長は「地域の力なくして農業の発展はない。提案をまちづくりに生かしたい」と述べ、地域主体の取り組みに期待を寄せた。

地方総合

各地の話題

梨・カモミールの魅力、加工品で発信

新たな加工場兼店舗をオープン

秋田・八峰町　やっほーfarm

【秋田】八峰町の地域おこし協力隊を卒業した山田勝さん、菜々子さん夫妻と越前谷淳さんの3人が立ち上げた㈲「やっほーfarm」が昨年12月、町内の空き店舗を改装して加工場兼店舗をオープンした。

店舗では、自ら栽培している梨やカモミールを加工した梨ジャム、梨ジュース、カモミールティーなどを販売している。店内では、梨の温かいミルクも飲むことができる。

商品は店舗販売だけに限らず、ネット販売やふるさと納税の返礼品として購入できる。今後は、ドライ梨やカモミールと梨をミックスさせた製品の開発をめざすという。

菜々子さんは「梨を栽培する際に、どうしても多く発生してしまう傷梨をゼロにしていきたい。梨農家の継承問題もあるので、町内から梨農家がなくならないように、さまざまな分野に取り組んでいきたい」と話す。

同法人が、梨農家を継承し、梨や加工品を販売することによる町おこしが期待される。

（八峰町農業委員会・南部陽香情報員）

店舗で商品をPRする3人。左から山田勝さん、菜々子さん、越前谷さん

冬の風物詩「芋フェスタ」

山梨　甲府市

「風土記の丘農産物直売所」で22日

【山梨】中央自動車道甲府南インターチェンジを降りてすぐにある甲府市の「風土記の丘農産物直売所」では、今月22日に恒例の人気イベント「芋フェスタ2026」を開催する。

今年で4回目を迎えるイベントは、毎年多くのファンが訪れる冬の風物詩。昨年は約600人を超える来場者でにぎわいを見せた。目玉の焼き芋はしっとりとした食感と濃厚な甘みが特徴の地元産「ひめあやか」などを約200本販売する予定だ。

このほか、干し芋や芋を使った和菓子、総菜、スープの販売などバラエティーに富んだ魅力的な内容となっている。

同所を運営している（一社）中道農産物加工直売組合の山本宮樹所長は「イベントを通して市内のサツマイモのおいしさを多くの人に知ってもらいたい。また、直売所では四季折々のイベントを行っているので、次のイベントも期待してほしい」と語る。

風土記の丘農産物直売所に関する問い合わせは、ホームページ（https://fudoki-nakamichi.com）まで。支払いは現金のみで、店内も通常営業している。

芋フェスタのPRチラシ